

# 『一切悪趣清浄タントラ (*Sarvadurgatipariśodhana Tantra*)』 におけるマンダラ儀軌の一考察

—— Ānandagarbha 釈を中心に ——

スダン・シャキャ

## はじめに

『一切悪趣清浄タントラ(*Sarvadurgatipariśodhana Tantra*)』(以下 SDPT と略す)における根本的な概念は「悪趣(durgati)」を「浄化(pariśodhana)」することである。本稿では、悪趣の浄化を達成するために用いるマンダラ儀軌の特徴を明らかにすることを目的とする。

SDPT は、瑜伽タントラに属する『真実摂経(*Sarvatathāgatatattvasaṃgraha*)』の釈タントラの一つであり、そのうち、第二降三世品に関する釈タントラであるといわれている<sup>1</sup>。このタントラには二種類<sup>2</sup>あり、二本ともチベット大蔵經に収録されている。これらは、(1) Śāntigarbha と Jayaraksita が 8 世紀に翻訳し、Rin chen mchog が校訂した『清浄タントラ』(以下 SDPT-1 と略す、Toh 483, Ota 116) と、(2) Devendradeva 及び Māṇikaśrījñāna が Chos rje dpal と共に 13 世紀に翻訳した『九仏頂タントラ』(以下 SDPT-2 と略す、Toh 485, Ota 117) である<sup>3</sup>。現存するサンスクリット原典は SDPT-2 に相当する。このタントラは、ネパールで今日でも葬送儀礼に用いられている<sup>4</sup>。SDPT には、マンダラ儀軌、護摩儀軌などの諸儀軌が説かれているが、本稿ではマンダラ儀軌のみを取りあげる。

SDPT-1 と SDPT-2 では、あらゆる悪趣を浄化するために、マンダラあるいはマンダラ儀軌が必要であることが説かれている<sup>5</sup>。すなわち、真言の名を聞いたり読んだりするだけで、男女の区別なくだれもが悪趣から逃れることができ、

さらに、現世から去るべき者の身がマンダラに入って灌頂されることによって、たとえ地獄に堕ちたとしても脱することができるというのである。

SDPT 本文に関する註釈は以下の五本である。これらはほとんど SDPT-1 に関するものであり、チベット大蔵經に収録されている。

- a. Buddhaguhya : *Durgatipariśodhanārthavārttika-nāma* Toh 2624, Ota 3451.
- b. Kāmadhenu : *Āryasarvadurgatipariśodhanatejorāja-nāma-kalparāja-ṭīkā* Toh 2625, Ota 3452.
- c. Vajravarmaṇ : *Bhagavatsarvadurgatipariśodhanatejorājatathāgatārhatṣam-yaksambuddhamahātantaṭṭarājavayākhyā-sundarālaṃkāra-nāma* Toh2626, Ota3453<sup>6</sup>.
- d. Anonymous : *Sarvadurgatipariśodhanatejorājakalpālaṃkāra-nāma* Toh 2627, Ota 3454.
- e. Ānandagarbha : *Sarvadurgatipariśodhanatejorājatathāgatārhatṣamyaksambuddhasya-nāma-kalpa-ṭīkā* Toh 2628, Ota 3455.

これら以外に、儀軌のみを扱う文献は、Ānandagarbha の著作を含む, Buddhaguhya, Dharmakīrti のものが複数存在するが、本稿では Ānandagarbha の著書のみを取りあげる。

先行研究においては、Ānandagarbha による儀軌を中心とした註釈が、SDPT-2 の編纂に影響を与えているということが明らかになっているので<sup>7</sup>, 本稿では、Ānandagarbha の諸著作の中から、マンダラ儀軌に関する以下の三種の儀軌を取りあげて考察をする。

- [1] 『一切惡趣清淨マンダラ儀軌非鬘 (*Sarvadurgatipariśodhanamaṇḍalavidhikṛpāvalī-nāma*), Toh 2631, Ota 3458 (以下 MV-1 と略す)。
- [2] 『一切惡趣清淨大マンダラ成就法 (*Sarvadurgatipariśodhanamahāmaṇḍalāsādhana*)』, Toh 2630, Ota 3457 (MV-2 と略す)。
- [3] 『一切惡趣清淨マンダラ儀軌 (*Sarvadurgatipariśodhanamaṇḍalavidhi-nāma*)』, Toh 2635, Ota 3460 (MV-3 と略す)。

既に乾仁志氏は MV-3 を取り上げて、漢訳大蔵經典に伝わっている『仏教大乘觀想曼拏羅淨諸惡趣經』（大正大蔵 No. 939）が、MV-3 の漢訳であることを明らかにしている<sup>8</sup>。さらに、SDPT-2 の編纂に、Ānandagarbha の諸註釈書と著書『金剛大曼荼羅儀軌一切金剛出現（*Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā-sarvavajroḍya*）』<sup>9</sup> が影響を与えたと考えられる点も指摘している。MV-1 と MV-2 に関してはまだ研究がない。両者には類似する内容が多く、また MV-1の方が MV-2 に比して記述が詳細である。よって以下では MV-1 を中心に考察を進めたい。

### 1. MV-1 の内容および構造

MV-1 の内容を表にしてみると以下ようになる。

内容	デルゲ版	北京版
帰命偈頌	124b <sup>5</sup> ～124b <sup>7</sup>	147b <sup>5</sup> ～147b <sup>7</sup>
1. 前予親近の儀軌	125a <sup>2</sup> ～141a <sup>3</sup>	147b <sup>7</sup> ～167a <sup>6</sup>
2. 浄地儀軌	141a <sup>3</sup> ～141b <sup>5</sup>	167a <sup>6</sup> ～168a <sup>2</sup>
3. 入壇許可	141b <sup>5</sup> ～144b <sup>1</sup>	168a <sup>2</sup> ～171b <sup>2</sup>
4. 墨打ちの儀軌	144b <sup>1</sup> ～145a <sup>4</sup>	171b <sup>2</sup> ～172a <sup>8</sup>
5. マンドラの描くための儀軌	145a <sup>4</sup> ～149a <sup>2</sup>	172a <sup>8</sup> ～177a <sup>6</sup>
6. マンドラ作法	149a <sup>2</sup> ～152a <sup>6</sup>	177a <sup>6</sup> ～181b <sup>2</sup>
7. マンドラ遍入	152a <sup>6</sup> ～153b <sup>1</sup>	181b <sup>2</sup> ～181b <sup>5</sup>
8. 灌頂次第	153b <sup>1</sup> ～156b <sup>1</sup>	181b <sup>5</sup> ～186b <sup>4</sup>
9. マンドラの護摩	156b <sup>1</sup> ～156b <sup>5</sup>	186b <sup>4</sup> ～187a <sup>3</sup>
結頌	156b <sup>5</sup> ～156b <sup>7</sup>	187a <sup>3</sup> ～187a <sup>6</sup>

MV-1 は内容的に前半部分 (1.) と後半部分 (2.～9.) に分けることが出来る。前半部分、すなわち前予親近の儀軌は三種三摩地 (samādhitrāya) である初加行 (Ādiyoga), マンドラ最勝王 (Maṇḍalarājāgrī), 羯磨最勝王 (Karmarājāgrī) から構成されている<sup>10</sup>。初加行三摩地では、舌の加持、手の加持、二十種の供養、五相成身観などが説かれている。マンドラ最勝王三摩地では十六菩薩、賢劫十

六菩薩などの出生が説かれている。また、羯磨最勝王三摩地では毘盧遮那によって化作された諸尊の功德業を明らかにしている。この三種三摩地は SDPT-1 では説かれておらず、後に編纂されたといわれている SDPT-2 には説かれている。この三種三摩地は、Ānandagarbha が『真実摂経』をはじめ、他の經典の註釈を著すときにも使用している。

一方、後半部分では、浄地儀軌・墨打ち法・マンダラ作壇・マンダラの具体的な描き方が扱われているほか、諸灌頂次第や護摩等も簡潔に説かれている。また、ここで説かれているマンダラは毘盧遮那を中尊とする八輻輪マンダラであり、これは SDPT-1 が説く諸マンダラ<sup>11</sup>の中で根本マンダラとされる最初のマンダラの詳細な説明である。

## 2. MV-1 のマンダラ構造

当然のことながら、マンダラ儀軌を行うためにはマンダラが必要である。MV-1 に用いられるマンダラの構造<sup>12</sup>の概観を説明すると、まずマンダラの四方に悪趣清浄王、宝幢、釈迦牟尼、開敷華王を布置し、四維に仏眼、マーマキー、白衣、ターラーの『秘密集会タントラ (*Guhyasamāja Tantra*)』にも伝わっている四仏母を置く八輻輪の構成となっている。その八輻輪の外側に、『真実摂経』が説く金剛界マンダラの金剛薩埵をはじめとする十六菩薩、八供養菩薩、四摂菩薩が位置する。さらに、その外側には弥勒をはじめとするいわゆる賢劫十六菩薩が説かれ、またさらにその外側に三十二輻輪が続き、東に阿難 (Ānanda) をはじめとする八声聞、南に黄白 (Kapila) を初めとする八縁覚、西には大力 (Mahābala) をはじめとする八忿怒、北には獅子面 (Simhamukhī) をはじめとする八使者が説かれている。さらにその外側に、六十四輻輪があり、持国 (Dhṛtarāṣṭra) 以下の四天王、地天 (Pṛthivī) などの八方守護神、太陽 (Āditya) などの八惑星、ローヒニー (Rohinī) などの二十八星宿、ヴァーサ (Vyāsa) などの八仙人、ベーマチトラ (Vemacitra) などの八世主が説かれている。その外周部が天、人などの六つの住処に分かれていることが説かれている。

### 3. MV-1 の特徴

MV-1 は SDPT に基づく、悪趣を浄化するために用いるマンダラ儀軌の一つであり、文献上この儀軌は以下のような興味深い特徴を有している。

#### 3-1. MV-1 および SV との関係

Ānandagarbha の代表作というべき著書『金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現 (Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā-sarvavajrodya)』<sup>13</sup> (以下 SV と略す) は、『真実摂経』の金剛界大マンダラ品を中心に説く儀軌であり、瑜伽三摩地を獲得するための儀軌である。内容的に、SV も MV-1 と同様に二つに大別することができる。前半部分は、三種三摩地が中心であり、後半部分はマンダラ儀軌、灌頂次第、護摩などが説かれている。

前述したように、MV-1 と SV には内容的な類似点があることから、ここでは、SV と比較しながら、MV-1 の特徴を明らかにしていく。

結論から述べると、MV-1 は形式的な面では SV にならいつつも、内容的には『一切悪趣清浄タントラ』の独自性を表した儀軌であると考えられる。その根拠となる点を以下に示していく。

##### 3-1-1. 二十種の供養

SV では花、焼香、燈、塗香など二十種の供養の詳しい説明がある<sup>14</sup>。同様の説明は、SV より後に編纂された SDPT-2 にも見られる<sup>15</sup>。ところが MV-1 ではこの点が省略されており、

Om 一切如来の花供養雲海舒遍三昧耶 hūṃ 云々と共に二十種の供養物を  
他の典籍〔で説かれている内容〕と一致するように奉獻する<sup>16</sup>。

となっている。ここで、「他の典籍」というのは SV のことと考えられる。何故なら、SV には二十種の供養物が説かれているからである。

##### 3-1-2. 根本真言

MV-1 では、タントラ本文 (SDPT-1 と SDPT-2) の根本心真言<sup>17</sup> と類する

以下のような真言がある。

Om̐ namo bhagavate citta sarvadurgatipariśodhanarājāyā tathāgatār-  
hate samyaksaṃbuddhāya/ tadyathā/ om̐ śodhaya śodhaya/ śudd-  
heviśuddha sarvakarmāvaraṇaviśuddhe svāhā/<sup>18</sup>

また MV-1 の別の箇所では次のような真言がある。これも、タントラ本文の根本真言から使用している。

Om̐ namo bhagavate sarvadurgatipariśodhanarājāyā tathāgatāyā ar-  
hate samyaksaṃbuddhāya/ tadyathā/ om̐ śodhani śodhani sarvapāpaṃ  
viśodhani śuddhe viśuddhe sarvakarm āvaraṇa viśuddhe svāhā/<sup>19</sup>

またこの真言は、仏眼、マーマキーなど、MV-1 のみで説かれる諸尊の出生にも用いられている<sup>20</sup>。なおこの箇所は、SV にはなく、MV-1 のみに説かれている。

ここから分かるのは MV-1 が SV の形式を用いつつ、SDPT の内容を当て嵌めていることである。つまり、MV-1 は形式的には SV の流れに沿いながら、内容的には悪趣を浄化するというその目的を同じくするタントラである SDPT を意識しているのだと考えられる。

### 3-1-3. 金剛薩埵を毘盧遮那に置換

大印の成就法の中で、MV-1 には「面前の空中にある [月輪] の上に『毘盧遮那よ、ア』と唱えてから入る」<sup>21</sup> とあるが、SV では「面前の空中にある月輪の上に、金剛薩埵よ、アと唱えて入る」<sup>22</sup> とある。続いて同じ箇所では「『私は金剛毘盧遮那だ。』と唱えて、白色の毘盧遮那の御体を観想する」<sup>23</sup> と説かれる。一方、SV では「『私は金剛薩埵だ』と唱えて白色の金剛薩埵の御大を観想する」<sup>24</sup> とあり、毘盧遮那が金剛薩埵に置き換えられている注目すべき箇所がある。前後の文はまったく同じであることから、金剛薩埵と毘盧遮那を機械的に置き換えただけであると言える。

これは、MV-1 が毘盧遮那を中心に説くものであるがゆえに、SV における金剛薩埵の箇所を MV-1 では毘盧遮那に置き換えたのだと考えられる。

### 3-1-4. 真言の省略

MV-1 では、金剛薩埵から金剛鈴までの諸尊の傲慢相を次のような簡略体裁で説いている。

更にそれらが変ずるものとしての形相としての印、即ち「私は金剛〔薩埵なり〕」という所から、「私は〔金剛〕 鈴なり」という所までによって〔それぞれ〕金剛薩埵から金剛鈴までの姿形としての印となる<sup>25</sup>。

ここに略されている印の説明はSV では略されることなく、すべての真言が記されている<sup>26</sup>。MV-1 には同様の箇所が他にもある。

同じく『Om, 私は金剛薩埵なり』という所から、『Om, 私は金剛鈴なり』という所までにより、一切悪趣清浄等の住处に各々の〔尊〕の部族に基づいて表現された色と幟幟を握って住することになる<sup>27</sup>。

ここでも真言が略されているが、SV においては略されることなく諸尊の法印の真言がすべて記されている<sup>28</sup>。また、MV-1 の他の箇所では金剛鉤など四摂の真言も略されている。さらに、諸尊の三摩耶印を結んで見渡す真言も次の箇所で略されている。

そして鉤等との相応によって鉤召し、〔引入し〕束縛し自在にする等々をなしてから、それぞれの三摩耶印を結び〔次のような〕心真言等をとえながら観るべきである。「金剛薩埵よ、見よ」という所から「金剛鈴よ、見よ」までによって観るべきである<sup>29</sup>。

上記と対応するSV の箇所においては、MV-1 で略されている四摂の真言や諸尊を見渡す真言を略することなく、すべて詳しく記されている<sup>30</sup>。

さらに、MV-1 では、マングラを建立する場所の風雨等の除滅について次のように説かれている。

それから、もし、マングラにおいて自身を僅かでも害すると考えて風と雨等を除外しようとするのであればマングラの光明によって、マングラに蟻塚(Valmika)の地で天等の障礙の形像を作り、聖不動三摩地によって、風を断ずることと雨を翻退すること等を儀則の規定通りに行ってから〔まず、〕マングラを描くべきである<sup>31</sup>。

この箇所は本儀軌では簡潔に説明されているが、SV<sup>32</sup>では詳しく説明されている。

以上のように、MV-1で略されている箇所がSVでは詳細に説かれていることから、MV-1はSVを意識し、その形式に則った作法であり、SVはMV-1の手本となっていると考えられる。

### 3-1-5. 独自の作法

MV-1はSDPTのマンダラ儀軌であるから、悪趣を浄化するという目的になった説明がなされている箇所がある。

多くのマールを余すことなく根本から抜き出すことをなさり、すべての啞者（話せない人）を話させるようになさり解脱の門すなわち空性門・無相門・無願門・無為と相応する<sup>33</sup>。

これはMV-1には見られるが、SVには見られない一節であり、このことから、MV-1はSVの形式に従いながらも、MV-1自体の目的のために独自の新しい作法が付け加えられていると考えられる。

### 3-1-6. マンダラ

MV-1には次のような箇所がある。

それから、自身の胸に輪の印から生じる「金剛輪」という心真言によって一切悪趣清浄マンダラを瞬時に化作し、「汝は三昧耶なり」と唱える<sup>34</sup>。

一方SVには次のような箇所がある。

それから、自身の胸の月〔輪〕の上に金剛歌の羯磨印によって金剛界大マンダラを化作し「汝は三昧耶なり」と唱える<sup>35</sup>。

両者を比べてみると、似ていることがわかる。しかし、説かれているマンダラが異なっている。MV-1に説かれるマンダラは一切悪趣清浄マンダラであるのに対し、SVに説かれるマンダラは金剛界大マンダラである。既に述べたが、MV-1は、SPDT-1のマンダラ儀軌の釈であり、そこに説かれているマンダラはSDPT-1の根本マンダラである。一方、SVは、『真実摂経』に依拠した儀軌

であり、そこに説かれるマンドラは金剛界大マンドラなのである。

説かれているマンドラが異なるということは、登場する尊格なども異なることになる。たとえば、一切悪趣清浄マンドラには、仏眼、マーマキー、賢劫十六菩薩などの尊格が登場するものの、金剛界マンドラには登場しないのである。

さらに、マンドラ壇の寸法について MV-1 における地の儀軌では次のように説かれている。

これ以降、大マンドラ業を始めるべきである。その中、王達の転輪等とは、八肘あるいは十五肘にすべし。大臣あるいは長者たちのは十五肘にすべし。成就者 (Yogin) 達のは十六肘あるいは、一二肘にすべし<sup>36</sup>。

これに比べ、SV では王の壇は百肘あるいは五十肘、大臣たちのは五十肘あるいは二十五肘等となっている<sup>37</sup>。このように、MV-1 と SV の作法はほとんど同じであるものの寸法が異なっており、それぞれ独自のものといえる。ここからも MV-1 は形式的には SV に従いながら、MV-1 独自の内容になっていることがわかる。

以上の 3-1-1～3-1-6 で示してきたように、MV-1 と SV の両文献には、尊名や真言などが機械的に置き換えられている箇所がある。また、SV では詳細に説かれている部分が、MV では簡潔に説かれているところが多く見られる。さらに、MV-1 には SV の形式を用いながら独自の解釈がなされている箇所もある。このように MV-1 は SV の形式を用いながらも、SDPT 独自の内容を組み込んで構成されていたものと考えられるのである。従って、成立の順番は SV の方が先であることになる。

### 3-2. 無上瑜伽的な解釈

MV-1 には、無上瑜伽階梯の文献に特徴的で他の瑜伽階梯所属の文献には見られないような記述が存在するので以下に示す。

#### 3-2-1. 手の観想

MV-1 には以下のような箇所がある。

それらの上に毘盧遮那等の種字を右手に観想し、[まず]金剛界自在等の種字を左手に観想すべし。その場合二本の親指に「Om̐」という字を観想すべし。兩人差し指に「Hūṃ」という字を観想すべし。両中指に「Trāṃ」という字を観想すべし。両薬指に「Dhiḥ」<sup>38</sup> という[字]を観想すべし。小指に「A」と観想すべし。そのようにそれらが転変して、金剛等の幟幟[が顕現する<sup>39</sup>]。

五本の指に布置されている種字は、タントラ本文が説く五仏のそれぞれに対応した五つの種字である。これは五部族を代表する種字でもある。仏、金剛、宝、蓮華、羯磨の五部族の主は、それぞれ、毘盧遮那、悪趣清浄、宝幢、釈迦牟尼、開敷の五仏である。さらに、方便を象徴する右手は男性尊、般若を象徴する左手には女性尊の種字を布置し、両手を合わせて観想する。以上の対応関係を表にすると以下ようになる。

部族	五仏	種字	指
仏	毘盧遮那	Om̐	親指
金	悪趣清浄	Hūṃ	人差し指
宝	宝幢	Trāṃ	中指
蓮	釈迦牟尼	Hriḥ	薬指
羯磨	開敷	A	小指

以上の手の観想法は、SV では見られない MV-1 独自のものであり、むしろ無上瑜伽階梯に配される文献で類似の内容が認められる点に注目したい。

### 3-2-2. 四輪の観想

MV-1 には次のように説かれている。

Yam̐ 字所変の青くて弓のような風輪を観想する。その上に Ram̐ 字所変の赤で三角の火輪を（観想すべし）。その上に、Vam̐ 字所変の白くて丸い水輪[を観想すべし。]その上に、Lam̐ 字所変の黄金の四角い地輪[を観想すべきである]<sup>40</sup>。

以上の四輪の観想は SV<sup>41</sup> に含まれず、また SDPT-1 にも見られないが、

SDPT-2 では重なる部分<sup>42</sup>がある。SDPT-2 と MV-1 の種字を比較すると次のようになる。

	<u>SDPT-2</u>	<u>MV-1</u>
風	Hūṃ	Yaṃ
火	Raṃ	Raṃ
水	Vaṃ	Vaṃ
地	Kaṃ	Laṃ

以上の表からも分かるように、火と水を観想する種字は同じであるが、風と地の種字が異なる。この内、MV-1 のこの四輪の観想の種字は、無上瑜伽系の儀軌<sup>43</sup>と一致する。

### 3-2-3. 文字の観想

MV-1 では次のように説かれている。

それから、自身の心臓に住する金剛の中央における自らの守護尊の心臓に住する金剛の中央に自身の守護尊の心髄を三摩耶形によって描く。それ自体に向かい合う〔尊格〕の中央に十六の母音文字を備えた〔真言〕が月輪の形象に変する〔ことを想い〕、またその上にある「Ka」字等が星のような形に変わることから、二つの月輪を観想すべきである。それらが一つになり、その上に「Vajra」という心真言、それより種々の光明をともなっている五鉤杵を観想すべきである<sup>44</sup>。

これと類似の観想法が後の無上瑜伽系の儀礼において確認される<sup>45</sup>。

MV-1 にはまた、次のようにある。

そして、一切法を空性として、観想して、

Om sūnyatāj nānavaj rasvabhāvātmake'ham (Om 我は空性金剛智を自性となすものである)」と唱える<sup>46</sup>。

この真言は SV には見られないが、後の無上瑜伽系の諸文献<sup>47</sup>には伝わっている。

## む す び

以上、悪趣を浄化するために用いるマンダラ儀軌である Ānandagarbha の著書 MV-1 を SV と比較しながら考察したところ、以下の三点が明らかになった。

1. Ānandagarbha が著した MV-1 は、彼自身が著した SV の形式を用いながら、『一切悪趣清浄タントラ』独自の儀軌として説かれている。
2. 観想法の中でも、「手の観想」をはじめとするいくつかの観想は、無上瑜伽階梯のそれに類似点を有する。
3. MV-1 に説かれているマンダラには、SDPT-1 が説く根本マンダラが詳細に説かれている。

今後の研究の課題としては、SDPT におけるマンダラ儀軌以外の護摩儀軌をはじめとする諸儀軌の検討とともに、Ānandagarbha 以外の者による諸註釈書及び儀軌に関する文献を考察することがある。

〈キーワード〉 悪趣，浄化，マンダラ，Ānandagarbha, *Sarvavajroḍya*

### 略号および主な参考文献

SDPT 『一切悪趣清浄タントラ (*Sarvadurgatipariśodhana Tantra*)』。

SDPT-1 『清浄タントラ (*Sarvadurgatipariśodhanatejorājasya tathāgatasya arhato samyakambuddhasya kalpa*)』Toh 483, Ota 116。

SDPT-2 『九仏頂タントラ (*Sarvadurgatipariśodhanatejorājasya tathāgatasya arhato samyaksambuddhasya kalpaikadeśa*)』Toh 485, Ota 117。

MV-1 Ānandagarbha: 『一切悪趣清浄マンダラ儀軌非鬘 (*Sarvadurgatipariśodhanamaṇḍalavidhikṛpāvali-nāma*)』, Toh 2631, Ota 3458。

MV-2 Ānandagarbha: 『一切悪趣清浄大マンダラ成就法 (*Sarvadurgatipariśodhanamahāmaṇḍalasādhana*)』, Toh 2630, Ota 3457。

MV-3 Ānandagarbha: 『一切悪趣清浄マンダラ儀軌 (*Sarvadurgatipariśodhanamaṇḍalavidhi-nāma*)』, Toh 2635, Ota 3460。

『真実撰経』『真実撰経 (*Sarvatathāgatattvasaṃgraha*)』堀内寛仁:『梵蔵漢対照初会金剛頂経の研究梵文校訂篇 (上) (下)』, 密教文化研究所, 昭和 58 年・昭和 49 年。

- SV Ānandagarbha: 『金剛大曼荼羅儀軌一切金剛出現 (*Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā-sarvavajroḍya*)』, Toh 2516, Ota 3339,
- SV. skt. 密教聖典研究会: 『Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā-Sarvavajroḍya 梵テキストと和訳ー(1)』, 『大正大学総合研究所年報』, 大正大学総合佛教研究所, 第八号, 昭和61年3月。(§§ 1-28)
- 密教聖典研究会『Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā-Sarvavajroḍya 梵テキストと和訳ー(2)』『大正大学総合研究所年報』, 大正大学総合佛教研究所, 第九号, 昭和62年3月。(§§ 29-87)
- 「Skorupski」T. Skorupski *The Sarvadurgatipariśodhana Tantra* Motilal Banarsidass, 1983.
- 「乾」 乾仁志: 『仏説大乘觀想曼拏羅淨諸惡趣經について』, 『印度學佛教學研究』第三十七卷第二號, 平成元年。
- 「桜井」 桜井宗信: 『インド密教儀礼研究ー後期インド密教の灌頂次第ー』, 法蔵館, 平成8年。
- 「桜井-1」 同: 『Cakrasaṃvarābhisamaya の原点研究』『豊山学報』第四十七号, 平成10年3月。
- 「桜井-2」 同: 『Cakrasaṃvarābhisamaya 研究(2)』『密教図像』第16号, 平成9年12月。
- 「高橋 D-1」 高橋尚夫: 『Sarvadurgatipariśodhanatantra (一)ー梵文校訂テキストと和訳ー』『壬生台舜博士頌寿記念・仏教史の思想』, 大蔵出版, 昭和60年, pp. 123-147。(§§ 1-30)
- 「高橋 D-2」 同: 『Sarvadurgatipariśodhanatantra (二)ー梵文校訂テキストと和訳ー』『那須政隆博士米寿記念・仏教思想論集』成田山新勝寺, 昭和59年, pp. 46-77。(§§ 30-79)
- 「高橋 D-3」 同: 『Sarvadurgatipariśodhanatantra (三)ー校訂と和訳ー』『豊山学報』28, 29号, 昭和59年, pp. 1-39。(§§ 80-120)
- 「高橋 D-4」 同: 『Sarvadurgatipariśodhanatantra (四)ー校訂と和訳ー』『豊山学報』30号, pp. 1-33。(§§ 121-141)
- 「高橋 D-5」 同: 『Sarvadurgatipariśodhanatantra (五)ー校訂と和訳ー』『豊山学報』31号, pp. 1-17。(§§ 142-153)
- 「高橋 SV-1」 高橋尚夫: 『金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現第一瑜伽三摩地品ー和訳ー』, 『密教文化』161, 昭和63年1月。(§§ 1-67)
- 「高橋 SV-2」 同: 『金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現ー和訳ー完』, 『豊山学報』32号, 昭和62年3月。(§§ 126-151)
- 「高橋 SV-3」 同: 『金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現』『豊山学報』33号, 昭和63年3月。(§§ 136-143)
- 「高橋 SV-4」 同: 『金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現ー第一瑜伽三摩地品・西藏テキスト並梵文補遺ー』『豊山学報』34号, 平成元年。
- 酒井真典: 『酒井著作集 III』法蔵館, 昭和60年5月。

羽田野伯猷：「チベット仏教受容の条件と変容の原理の一側面」、『羽田野著作集チベット・インド学集成』第二巻，法蔵館，昭和62年。

森雅秀：『マンドラの密教儀礼』，春秋社，1997。

### 注

- 1 酒井真典「悪趣清浄軌」、『酒井著作集 III』 pp.199-226（初出『密教文化』123）。
- 2 「Skorupski」では、二種の文献を Version A と Version B としているが、ここでは、後に示すようにそれぞれ SDPT-1 と SDPT-2 とする。
- 3 塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文編著『梵語仏典の研究 IV 密教經典篇』平楽寺書店，1989年，p.211（川嶋健氏稿）：頼富本宏『密教仏の研究』法蔵館，1990年，pp.251-252。
- 4 氏家昭夫「悪趣清浄マンドラとその観想」、『密教学研究』，第7号，日本密教学会，昭和50年。SDPTの根本マントラとされているマントラは

Om namo bhagavate sarvadurgatipariśodhana rājāya tathāgatārhatē samyak saṃbuddhāya/ tadyathā/ Om śodhaya śodhaya śuddheviśuddhe svāhā//  
であり（注17参照），これはネパールでは葬送儀礼の時に唱えられる。家から火葬場に死体を運ぶ時などにこのマントラをくり返し唱えながら運ぶ。

また，八月ごろには，カトマンドゥ盆地のパタン市内で「マタヤー」という巡礼祭が行われるが，この日にはその年亡くなった人が地獄に堕ちないことを願って，遺影とこの根本タントラを印刷した紙と賽銭とを，遺族たちは一日かけて四千近くある市内の仏塔のすべてに巡礼して歩くのである。

- 5 Toh 483, 61a<sup>1</sup>~62a<sup>2</sup>・「Skorupski」, 8a-9a (p.130, 132)・「高橋 D-1」, , §§ 27-30。
- 6 デルゲ版の東北目録の Toh 2626 は Kun dga' snying po (Ānandagarbha) の著書として記している。また，Toh 2626 の奥書(219b<sup>4</sup>)では，「rDo rje go cha (Vajravarman) の弟子である Ānandagarbha によって著され，完成された」と書かれている。しかし，北京版の奥書(Ota 3453, 239a<sup>7-8</sup>)では，「弟子である Ānandagarbha によって，(slob ma kun dga' snying po)」という文が欠けており，これはナルタン版でも同様である。つまり，「rDo rje go cha (Vajravarman) によって著され，完成された」と記されている。

以上述べたことから，デルゲ版のみに「弟子である Ānandagarbha によって」という文が付加されていることが分かる。したがって，この文献は，Vajravarman の著書であると考えられる。チベット語テキスト(Toh 2626, 219b<sup>4</sup>/Ota 3453, 239a<sup>7-8</sup>)，

bcom lden 'das de bzhin bshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas ngan song thams cad yongs su sbyon ba'i 'grel pa mdzes pa'i rgyan zhes bya ba slob dpon chen po rdo rje go cha' slob ma kun dga' snying pos mdzad pa rdzogs so//

また，本論が取りあげる Ānandagarbha の著書(MV-1, Toh 2631, 156b<sup>5</sup>~b<sup>7</sup>)においても，Ānandagarbha はスリランカから来た Vajravarman 金剛大阿闍梨の弟子であると指摘されている。以上に述べてきた，SDPT に関する文献の記述から判断すると Vajravarman と Ānandagarbha は師弟関係にあることがわかる。

- 7 「Skorupski」 p. xxiii.
- 8 乾仁志「仏説大乘観想曼拏羅淨諸悪趣経について」『印度學佛教學研究』第 37 巻第 2 號, 平成元年。
- 9 Toh 2516, Ota 3339 (注 13 を参照)。
- 10 この三種三摩地が初めて説かれたのは *Vajrasekhara Tantra* においてである。ここでは, 初加三摩地と羯磨最勝王三摩地については具体的に解説されているが<sup>3</sup>, マンドラ最勝王については名称のみが示されている。  
桜井宗信「Vajrasekharatantra の一考察」, 『智山学報』第 35 輯, 昭和 61 年, p. 47, 註 (11)。
- 11 SDPT-1 と SDPT-2 を含めてそれぞれ 11 種と 12 種のマンドラが説かれている。酒井真典「悪趣清浄儀軌のマンドラ」, 『酒井著作集 III』法蔵館, 昭和 60 年 5 月, 初出『密教学会報』17・18。
- 12 Toh 2631, 145b<sup>7</sup>~148b<sup>3</sup>。このマンドラに登場する尊格は *Nāmasaṃgī* を根本經典とする「法界自在マンドラ」に共通するため, 今後, 両者の比較検討をしたい。  
長野泰彦・立川武蔵編『国立民族学博物館研究報告別冊』第 7 号, 国立民族学博物館, 平成元年 3 月。
- 13 SV に関しては, サンスクリット語校訂テキストとともに先行研究の多くある中で, ここでは, 略号および参考文献にあげている, SV. skt, 「高橋 SV-1」, 「高橋 SV-2」, 「高橋 SV-3」, 「高橋 SV-4」以下の研究論文を参照し, MV-1 との比較を行う。MV-1 と類似する箇所はチベットテキストの箇所および先行研究のセクション番号で示していく。
- 14 「高橋 SV-1」 § 21・Toh 2516, 4a<sup>1</sup>~6a<sup>7</sup>。
- 15 「高橋 D-1」 §§ 58-77・「Skorupski」14a-17a。
- 16 Toh 2631, 126b<sup>4</sup>。
- 17 根本真言といわれている真言は SDPT-1 と SDPT-2 との両方に共通する。ここでは「Skorupski (6<sup>a</sup>-6<sup>b</sup>)」のサンスクリット校訂テキストを使用する。なお, 「高橋 D-1」§ 17 と Toh 483, 61a<sup>k</sup> 異なる箇所がある。  
Om namo bhagavate sarvadurgatipariśodhanarājāya tathāgatārhathe samyak-saṃbuddhāya/tadyathā/om śodhane śodhane sarvapāpaviśodhani śuddhe viśud-dhe sarvakarmāvaraṇaviśodhani svāhā//  
(Om 世尊一切悪趣清浄王如来阿羅漢正等覺者に帰命致します。すなわち, Om 浄める者よ浄める者よ 一切罪惡をより浄めるものよ 清浄において一切業障をより浄めるものよ svāhā)
- 18 Toh 2631, 128b<sup>3</sup>。サンスクリット表記はチベットテキストを底本としたものである。この真言は根本真言に類し, さらに「citta」という言葉が付加されている。サンスクリット表記はチベットテキストを底本としたものである。
- 19 Toh 2631, 134b<sup>7</sup>~135a<sup>1</sup>。
- 20 Toh 2631, 134b<sup>3</sup>~134b<sup>7</sup>。
- 21 Toh 2631, 130a<sup>4</sup>。

- 22 「高橋 SV-1」 § 39・Toh 2516, 9a<sup>4</sup>。  
 23 Toh 2631, 130a<sup>4</sup>。  
 24 「高橋 SV-1」 § 39・Toh 2516, 9a<sup>5</sup>。  
 25 Toh 2631, 130b<sup>1-2</sup>。  
 26 「高橋 SV-1」 § 41・Toh 2516, 9b<sup>2</sup>。  
 27 Toh 2631, 130b<sup>2</sup>。  
 28 「高橋 SV-1」 § 42・Toh 2516, 9b<sup>4</sup>。  
 29 Toh 2631, 130b<sup>2-3</sup>。  
 30 「高橋 SV-1」 §§ 43-44・Toh 2516, 9b<sup>5</sup>~10a<sup>1</sup>。  
 31 Toh 2631, 145a<sup>4-5</sup>。  
 32 SV. skt §§ 57-60・Toh 2516, 29a<sup>2</sup>~30a<sup>5</sup>。  
 33 Toh 2516, 138b<sup>2-3</sup>。  
 34 Toh 2631, 129b<sup>4</sup>。  
 35 「高橋 SV-1」 § 30・Toh 2516, 8a<sup>1-2</sup>。  
 36 Toh 2631, 141a<sup>3-4</sup>。  
 37 SV. skt § 29・Toh 2516, 23a<sup>4-7</sup>。  
 38 薬指に観想される種字は Dhiḥ であるが、おそらくこれは釈迦牟尼の種字 Hriḥ の間違いだと考えられる。MV-1 中では、別の箇所 (Toh 2631, 137b<sup>7</sup>) 灌頂の真言として「Om Hūṃ Trāṃ Hriḥ Aḥ」がある。これと同様な観想法は Bu sTon (Toh 5134, 339a<sup>6</sup>) も説いており、「Om Hūṃ Trāṃ Hriḥ A」 とある。  
 39 Toh 2631, 128b<sup>3-5</sup>。  
 40 Toh 2631, 134b<sup>1-2</sup>。  
 41 MV-1 や SDPT-2 のように四輪の観想は見られないものの、「Hūṃ字所変の金剛風輪よりはじめて大海まで観想する」(Toh 2516, 14a<sup>5-6</sup>・「高橋 SV-1 § 61」) とある。  
 42 「Skorpski」 26b・「高橋 D-4」 § 122。  
 43 「桜井-1」 p. 4。田中公明『生と死の密教』, 春秋社, 平成 9 年, pp. 86-92。  
 44 Toh 2631, 129a<sup>5-7</sup>。  
 45 「桜井-1」, p. 4。「桜井-2」, p. 12, 註 14。  
 46 Toh 2631, 132a<sup>7</sup>。  
 47 「桜井-1」, p. 4。Yukei Matsunaga *The Guhyasamāja Tantra* Toho Shuppan, 1978, Chap. 3, p. 11。

A study on *maṇḍalavidhi* of the *Sarvadurgatipariśodhana Tantra*  
— As described by Ānandagarbha —

Sudan Shakya

The *Sarvadurgatipariśodhana Tantra* belongs to the Yoga class of Tantric Buddhism. It is one of the popular Buddhist texts preserved until today as a rite for the dead in Nepal. This *Tantra* describes different *vidhis* (methods) like *maṇḍalavidhis*, *homavidhis* for purging or eliminating the evil destiny. Although there are several works to this *Tantra* by different authors, this paper focuses only on the work of Ānandagarbha (9C-10C), the *Maṇḍalavidhi* (MV-1, Toh 2635), attempting to reveal its textual characteristics. He is a renowned scholar and author of a number of commentaries especially on the Yoga class of *tantras*.

On comparing MV-1 with the *Sarvavajyodaya* (SV, Toh 2516), regarded as one of the most important works of Ānandagarbha, I have come to the following conclusions.

1. The composition of MV-1, although described as an original method of the *Tantra*, closely resembles the structure of SV.
2. Some of the meditation methods such as ‘a meditation of hands’ are similar to the meditation methods performed in Anuttarayoga class.
3. The *maṇḍala* described in MV-1 makes a detailed explanation of the basic *maṇḍala* of the SDPT-1.